土蔵

第 7 号

砺波郷土資料館土蔵友の会

白山信仰と地蔵半跏石仏のひろがり(1)

――特に砺波地方を中心に――

尾田武雄

一

路傍の石仏の多くは地蔵菩薩である。笠地蔵の民話などに出てくる地蔵のように庶民には、親しみを覚える菩薩である。富山県西部の砺波地方にも、農村の辻々に多くの石仏が造立されている。この地方は真宗王国といわれるくらいに、真宗門徒が多い。その真宗の教義に拘わらず、地蔵、不動明王、観音、聖徳太子南無二歳像の石仏が多く造立され、石仏を総じて「ゾーサマ（地蔵様）」と呼称されているくらいである。

この地方の石仏の多くは、幕末から明治期にかけて、地元の庄川町金屋から採掘された緑色凝灰岩いわゆる金屋石の石材で造立されたものが多く、昭和後期になると見るべき石仏がなくなってしまう。

近世末から明治期には、爆発的に石仏が造立されたこの地方であるが、中世にも中世石造遺物と称される宝篋印塔、五輪塔、層塔等に混って如来形仏と地蔵の石仏が散見することがある。そして如来形仏は土饅頭の上に差し込む状態で露座であり、地蔵は緻密で白い砂岩質の石材で半跏像で、神社内の室内仏である場合が多い。これらは共に鎌倉時代後半から室町時代に造立されたと推定できる。

地蔵菩薩は、仏滅後弥勒菩薩がつぎの仏としてこの世にあらわれるまで、五濁悪世の無仏世界の衆生の救済を、仏からゆだねられたところにあるとされている。

平安時代中葉以降の末法思想と浄土教信仰の勃興によって民間の間にも地蔵信仰が広まったとされ、また鎌倉時代には禅宗諸派が地蔵十王信仰を重ねて強調し、加えて浄土教の普及による末世地獄必定の思潮が蔓延し、多くの地蔵が造立された。『地蔵菩薩霊験記』『今昔物語集』の地蔵説話なども喧伝されて庶民への信仰をかき立てたとされている。

地蔵信仰を布教した人々は、天台浄土教家[1]の動きを考えなければならないとされているが、田中久夫氏[2]は天台浄土教の影響下に成長を遂げたようにいわれているけれども、その積極的証拠はみられないし、地蔵信仰の布教者の中には天台の学僧以外のものが多い。地蔵菩薩を供養する天台系浄土僧もみられるけれど、ほとんど阿弥陀信仰の外護として地蔵をみ、浄土教の布教手段に転用したに過ぎない。真剣に地蔵信仰に生きその伝道にあたったのは、むしろ真言宗とそこから派生した修験の徒であるとされている。また伯耆大山の地蔵信仰は顕著であるけど、それは大山修験の支持によって大きな勢力と化し、山伏撒擽の峰々には虚空蔵と並んで地蔵の尊像が寄進・安置される風潮をもたらした。このようにみてくると当時の地蔵信仰は、単に法華持経者

の一群や横川流浄土教に支えられたわけではなく、真言密教にも受容され、山岳跋渉の修験者によって、広く諸国へ運ばれたということになる。それがまた今日の民間普及の素地にもなったと力説されている。この田中久夫氏の論文は『日本民俗学』八二号（昭和四十七年）に発表されたものであるが、中世の地蔵信仰を眺めるとき示唆の多い論文である。

ところで北陸は、東北地方とともに修験道が盛んであった。とくに白山と立山という代表的な修験の山がある。

二

『今昔物語集』には、立山関係の説話が五話あるが、立山地獄に落ちた人が仏の力によって救済されたとするのが三話、立山に参詣して修練したとするのが二話である。第十七巻第十八話「備中国僧阿清、地蔵ノ助ニ依テ活クルヲ得タル語」の中で、僧阿清が地獄へいって戻って来た話があるが、地獄で地蔵菩薩が現われて、僧阿清が「生キタル間、白山・立山ト云フ霊験ニ詣デテ」いたので生きかえったとあり、「此レ偏ニ地蔵菩薩ノ助ケ也ト知テ、殊ニ地蔵菩薩ニ仕ケリトナム語リ伝ヘタルトヤ」としている。

白山や立山で、修験として修行したので地獄に落ちたのにもかかわらず、地蔵菩薩の助けを得て生き返ったというわけである。また第十七巻第二十七話「越中立山ノ地獄ニ堕チシ女、地蔵ノ助ヲ蒙レル語」がある。延好という僧が、立山で参籠中に京都の七条にいたという女に出会い、生きていたときの祇陀院林の地蔵講に一、二度参詣したこと、そして「今地蔵菩薩、此ノ地獄ニ来リ給テ、日夜三時ニ我ガ苦ミニ代リ給フ」とし、「父母兄弟ニ此ノ事ヲ告ゲ、我ガ為ニ善根ヲ修セシメテ、我が苦ヲ抜キ給へ。然ラバ我レ世々ニモ其ノ恩ヲ忘ルベカラズ」とある。そして最後には「地蔵菩薩ノ利益、他ニ勝レ給ヘリ、地蔵講ニ一両度参レル女ノ苦ニ代リ給フ事、既ニ此ノ如シ。況ンヤ心ヲ至シテ念ジ奉リ、其ノ形像ヲ造リ画キ奉ラム人ヲ助ケ給ハム事ヲ思ヒ遣テ、世ノ人此地蔵菩薩ヲ帰依シ奉ルベシトトナム語リ伝ヘタルトヤ」としている。

ここでは、立山の地獄のことそして地蔵の心受苦が描かれ、当時の地蔵信仰も窺い知ることができるのである。そしてその遺物として、立山の登り口である芦峅寺には、六地蔵の磨崖仏があり、また頂上への参道脇や、室堂の付近にも地蔵の石仏を散見することができる。

ところで砺波平野では、この立山と白山は同時に拝することができる。そして中世にはどちらかといえば、立山より白山の影響を受けていたと思われる。そして白山と地蔵信仰について言及してみたい。

三

白山は、『万葉集』などの歌集に越の白山（しらやま）として歌われている。早くから修行禅定が行われていた。しかし白山の開山としては『泰澄和尚伝』によれば、越の大徳とよばれた泰澄とされている。『泰澄和尚伝』は、編者虎関師錬の賛に「有幣朽一軸、題後云、天徳二年、浄蔵門人神興受口授作伝」とあり、天徳二年（九五八）に浄蔵の門人の神興が筆記したとされている。この『泰澄和尚伝』の考察は、平泉澄[3]氏、下出積與[4]氏、浅香年木[5]氏、山岸共[6]氏等のすぐれた業績がある。浅香年木氏は「原泰澄伝」のもつ反体制の主張を受け継ぐ姿勢を貫いて、年

譜を作成しており、十三世紀中葉に成立した可能性が強いとされている。

虎関師錬著で元亨二年（一三二一）に成立した『元亨釈書』には「蔵縁」なる僧のことが記されてある。

釋藏縁。神融法師之徒也。形短小又甚醜。徐歩却疾。人走不レ及。専唱二地藏號一。無二別業一。游二化北土一。不レ移二佗方一。毀譽不レ遷。好行二施利一。人間二年齒一。對曰八十。然其只如二四十許一。感通如レ響。縛レ鬼降レ神。白山立山爲二修練場一。晩縛二菴白山笥笠一而居。臨終夜高唱二地藏號一。院中衆僧聞レ之謂。縁勤二持念一。詰朝至レ菴見レ之。向レ西端坐。合掌化

解読　　金子容士

釈蔵縁は神融法師の徒①なり。形短小、又甚しく醜なり。徐歩却って疾し。人、走れども及ばず。専ら地蔵号を唱へ、②別業なし。北土に游化し、③佗方に移らず、④毀誉に遷らず、好んで施利を行う。人、⑤年歯を問ふに、対えて八十と曰ふ。然れども、其の只四十許りの如し。感通すること響くが如く、⑥鬼を縛き、神を降す。白山、立山を修練場と為す。晩にして菴を白山の⑦笥笠に縛きて居る。

臨終の夜、地蔵号を唱ふ。院中の衆僧之れを聞いて謂へらく、「縁、持念を勤む。」と。⑧詰朝、庵に至りて之れを見るに、西に向かひて端坐し、合掌として⑨化せり。

〈語注〉

① 徒……門弟
② 別業……別の仕事
③ 佗方……他方　佗＝多
④ 毀誉……悪口や褒め言葉
⑤ 年歯……年齢
⑥ 縛く……巻く
「鬼を縛き、神を降す」は鬼神をも驚かすばかりという意
⑦ 笥笠……箱や笠　地名カ
⑧ 詰朝……翌朝
⑨ 化す……僧侶が死ぬこと

『今昔物語集』には、蔵明、蔵念、蔵海、蔵満、蔵縁等「蔵」の字のつく名前が多く出て来る。それらは地蔵信仰を布教および背負った人々である。『泰澄和尚伝』の口伝者浄蔵、そして『元亨釈書』の蔵縁、これら二人の「蔵」からも白山での地蔵信仰のイメージが広がるばかりである。

『神道集』（巻六・東洋文庫本）には、太郎剣御前の本地不動明王、次郎王子の本地虚空蔵菩薩、三郎王子の本地地蔵菩薩、四郎毘沙門の本地文殊菩薩、五郎王子の本地弥勒菩薩とある。また『白山権現講式』によると六所王子の内、禅師王子は地蔵にあてられている。『白山記』により山内の様子を見よう。同書の山内の記録は、白山のみならず平安時代末の山岳仏教の具体的様相を知る上に貴重な記録である。三所権現にはそれぞれ宝殿があり、五尺の金銅像（本地仏であろう）を安置する。宝殿に一尺八寸の鰐口を掛け、前に禅頂法皇（鳥羽法皇）御願の一丈の大錫杖を立てる。別山と大己貴はなおその前に香炉を置く。

室室は建物八宇、三所権現の御体を安置し、夏季開山中夏衆により法華八講などが執行される。山中にはなお不動明王などの宝社が見られるが、中でも檜新宮（中宮に向って延びる尾根の先端の伏拝地点、一六六〇メートル）は大きく、禅師権現（地蔵）と山上の三所を祭り修行地を兼ねた。加賀側は本宮境内にも禅師宮が祭られているし、中宮にも地蔵を奉じた蔵縁の伝承があって地蔵と縁が深い[7]とされる。

また江戸時代に長吏の記した『白山諸雑事記』によれば、下白山は陀祇所（談議所）と地蔵院とに護摩堂があり、前者は天台、後者は真言であったという。室町時代後期に至り講衆と山伏が分離し、山伏系が真言に属したのではないかと思われる。江戸時代長吏と神主の菩提寺は真言寺院であった。このことは加賀那谷寺や越前豊前寺、また白山と関係の深い能登石動山などが当時いずれも真言宗に属していることに関係があると思われる[8]。

本社と大汝の中間には六道の辻に見立てた地蔵堂（六道堂）があり、地蔵は藤原秀衡寄進と称されていた。

かように白山と地蔵は深いつながりを持つのである。

四

延暦寺は、白山権現を客人権現の名で山王七社に列している。仏教を基軸にした白山寺は、延暦寺の末寺となっていて、天台教団として一大勢力があった。しかし井上鋭夫氏[9]のいう「白山信仰は、本来は多様であったと考えた方がよい。その多様なものが泰澄に統合され、神・仏がまた統一されてくる、そのところを考えるべきではないか」には示唆が多い。ちょうど石動山が宗教センターのように、いろんな宗派を受け入れていたように、白山もまた理解すべきなのであろう。

富山県内の白山信仰のひろがりを『富山県神社祭神御事歴』（佐伯有義編・大正十三年発行）によると、菊理媛命を祭神とする白山社は百三十二社に及ぶという。上新川郡十五社、中新川郡十九社、下新川郡十六社、婦負郡四社、射水郡十二社、氷見郡二十六社、東砺波郡十二社、西砺波郡二十五社、富山市二社、高岡市一社である。富山県西部つまり呉西地区には七十六社あり、多くひろがりがある。

また加賀藩が、貞享二年（一六八五）に社寺の来歴を書き上げさせた「貞享二年の書き上げ」（『加越能寺社由来』と公刊されている）によると、射水郡鷲塚の真言宗善久寺は白山で修行した蔵縁の開基伝承がある。

善　久　寺

一善久寺開闢者、聖武皇帝之御宇天平元年ニ蔵縁法師草創仕候。其時代六坊在之、惣名号地蔵院、至当蔵九百五十七年ニ罷成候。其後乱世之砌中絶仕候処ニ、中興開山祐証正保四年ニ再建仕、今年迄三十九年ニ罷成候。寺屋敷地子地ニ而御座候御事。

貞享弐年八月九日　　越中鷲塚村真言宗　善久寺俊雄

（『加越能寺社由来』三六七頁）

正徳二年（一七一二）に加賀藩の寺社奉行の命を受け、各村の十村はそれぞれ管下の堂宮を調べて郡奉行に提出した。それが「正徳二年

九月堂宮社人山伏持分井百姓持分相守り申品書上ケ申帳」（川合文書）（俗に「正徳社号帳」という）である。越中四郡の内、砺波郡と射水郡の両郡しか現存しないが、富山県西部のものが現存することになる。それによると、白山社は射水郡に五十一社、砺波郡に十五社があり、それらの多くは能登の石動山から派生したと思われる場所に鎮座している。

「正徳社号帳」からは、白山信仰が白山からダイレクトに入っていることは窺い知ることはできない。

富山県西部には、庄川扇状地の砺波平野が広がっているが、その庄川の支流大白川は白山を水源としている。その源流からの信仰の広がりは考えられるし、砺波平野の南西に聳える医王山は泰澄の開基伝承を残している。

砺波地方では、真宗の教線は井波瑞泉寺等の活動によって獲得されたのであるが、同時に白山信仰の展開地域とほぼ一致しているとされている。[10] また「越中砺波地方における真宗と修験道」という論考[11]でも、原修験ともいうべき山岳宗教による深まりある体験の中から宗教の実証がされている。

五

これまで、地蔵信仰と山岳信仰とくに白山について論及を試み、また富山県西部に重層的に展開している白山信仰について若干述べてみた。

最近、富山県内各市町村では石仏悉皆調査が進められているが、いろいろな研究に役立っている。県内の石仏は、該して近世中期から造立されており、中世石仏はあまり多くはないが、古くから栄えた所には散見することがある。それらのほとんどが阿弥陀で、如来形仏であり、射水・砺波地方には、よく似た五、六百年前の石仏が少なからずあり、二十体あればせいぜい一体が地蔵であり、ほかはみな阿弥陀如来である。二十体中一体という地蔵は、また申し合わせたように、左足を垂下させた延命形といわれる姿のものである。

ところで、白山信仰が重層的にまたいろいろな形で浸透している富山西部、特に砺波地方と氷見地方に左足を垂下させた地蔵が多く展開しているのである。いずれも肉厚彫りの浮彫で、石材は灰白色で微粒子の砂岩質である。この地蔵について、若干考察をくわえたい。

福光町は、西に医王山を背負っている。その医王山は、永正五年（一五〇八）に成った『白山禅定私記』によると、白山を開いた泰澄は越前で修行の後、加賀国医王山の巌窟に移り練行した。臥行者（浄定行者）が弟子になったのもこの地であり、臥行者の呪力で日本海を航行する般の米俵や櫓を飛び運ばせたのが飛櫓山（戸室山）であるとしている。また江戸時代の地誌『越の下草』（宮永正運著）には次のように記している。

一、医　王　山　太美郷　香城寺村山跟の村也

人王四十四代元正天皇の御宇、養老三年三月泰澄（五日禪のイ）大師加州白山をくたり給ひて、はしめて此山をひらき、夥多の梵刹を建立し給ひしとて此山の中に群堂ケ原という処、其旧跡にて、今礎・磴（燈イ）石・共戸などの跡殊れり。其外堂辻なといふ処もあり。池のだいらに池有。四季とも水の増減なく、常に澄みたり。中に岩島ありて、上に古松

一樹あり。池の西方岩山に窟あり。泰澄大師修法を行し給ふ所也という。此窟に薬師・愛染・不動の三尊を彫付給へし(ひイ)と也。今は草苔の為に覆はれて分明ならす。往古は医師王山海蔵寺とて、堅固の大刹也と云。池のたいらを出て峯を経れは、三重に落る滝あり。其流岩上を下り尤清水にして勝景なり。是より攀躋すれは、白はげといふ峯に登る。凡此山大山にて、峯数多しといへとも、白はげは尤高くして、四方眺望するによろし。越中の山川浦々・金沢・宮腰浦・能浦(イなし)、上は小松・安宅浦(小塩崎潟イ)まで一臨の中に見ゆ。白はげまて、福光村より二里余(八町イ)、此処巓を界して、東は越中西は加州也。此山加州・越中両州に跟し、大山なり。医王山は惣名なり。是より湯涌温泉へ越れは道程二里半許(二十町ありイ)。此道筋に限らず、河北群二俣村等へくたる道あり。案内をかりて行へし。鎌中道といふは、砺波郡才川七村・小院瀬見村等より金沢へ行澗(ママ)道也。是も河北郡二俣村へ出て行也。

此山寺院の廃せしは、大永年中の頃也と云。里俗(の翁かたりイ)伝へて云へり。鳴子法師(此山中にイ)と云僧ありて、其住処もさだかならざるに、毎日此山院へ来りて斎飯を望む。是にあたふるに論(倫イ)をこへて大食す。衆徒かれをにくみて、或日酒を多く呑せて醉伏たる處をイ)簀巻にして深谷へ捨る。是より寺院日々衰却し、終に断絶に及びしと也。

ところで、弘長二年(一二六二)関東下知状によれば、医王山麓の弘瀬郷において柿谷寺と千手寺が登場し、地頭と領家が相論の対象としている。このことについて浅香年木氏[12]は、次のように記している。

地頭定朝の柿谷寺＝地頭氏寺説に対抗して、預所幸円は、

為泰澄大師建立之間、経数百歳星霜畢、何定綱造立之由、可掠申哉、為白山末寺之上、藤峯一宿也、院主職者代々領家進止之間、預所令居住畢云々、

と主張、地頭側は、

雖為私建立、北陸道之習、山臥通峯之時、依便宜令定于宿者、先例也、然者、当寺雖為医王山一宿、何非地頭進止哉云々、

と反駁、預所は、

医王山一宿之由、承伏之上勿論也云々、

と強調する。幕府は、「地頭建立歟、将又為預所進退否、共以無指証拠歟」という理由によって、「被尋問庄家、可有左右焉」と下知し、百姓層からの事情聴取に判断を委ねて結論をひかえているが、両者の主張が、「山臥通峯」の「医王山一宿」であるという点で一致をみていることより推して、白山宮加賀馬場の末寺の立場で医王山寺を構成する一坊舎であったことは疑いなく、事実、柿谷寺跡と目される館の神明社の鎮座地は、約三キロメートル南西の医王山頂への越中側の登攀路の起点に接する。預所側のいう泰澄創建説は、白山山系に濃密に形成された泰澄伝承の一斑を語るものであって、もとより事実ではあり得ないが、前掲の「宝治取帳」に除田が掲げられている郷内六社のなかに小白山社が見えることは注目されてよい。

医王山は、このように白山と本末関係にあり、その周辺における白山信仰の片鱗を地蔵石仏から探って見たい。

1、安居寺地主地蔵（福野町）

医王山麓から少し南の丘陵地に、福野町安居山の東麓台地に真言宗

の古刹弥勒山安居寺がある。この寺は、インドから渡来した僧善無畏三蔵を開基とし、養老二年（七一八）釈迦が造ったとされる聖観音を携えて、この地にいたり、一夏九旬安居したといわれている。またそれが寺号の由来とされている。

平安時代には、花山法皇が巡礼されたと伝え、藩政期には加賀藩の祈願所として栄えた。本尊の聖観音立像は、寺の秘仏で国の重要文化財に指定されている。また前立正聖観音立像は、鎌倉時代の作で県の指定文化財としてあり、古くから寺院が営まれてきたのである。

ところで、この寺には「地主地蔵」という石造の右手に錫杖、左手に宝珠の足をふみ下げた半跏像の延命地蔵がある。高さは三十一・五センチ（『福野町史』では四十九センチ・『富山県史』・通史編Ⅱ中世』では四十五・五センチとしているが明らかな誤りである）幅は岩座の最大幅で二十三・五センチであり、鎌倉中期より末期にかけての作とされている。この寺では、この地蔵がもともとこの地にあったものとされ、地蔵が観音に変ったものとして伝えている。[13]

また稿本『越の下草』には次のような地蔵縁起を載せている。

安居弥勒山地主地蔵尊略縁起

當山ハ中天竺善無畏三蔵一夏安居の靈地。本尊ハ聖観音（由来世ニ知る所也）、地主ハ地蔵大菩薩にて、磨石の尊像御長一尺壱寸あり。伝に云、往昔二十四院の精舎、鎮殿宝塔ありといへども、天災又兵火のために焼亡ス。

貞治三年の春、御手川の邊りに小堂を建て安置し奉る（今地蔵堂と号て森有。）物変り星移りて又破壊に及。依之、文禄二年の秋、此尊像を今の観世音の堂内に遷せり。抑霊験不思儀なること、日を重ね、翰紙にも尽し難し。今其霊跡の森の花果枝葉に至る迄、仮初にも伐取ものは即時に災難を蒙り、又日を歴て、火難に逢ものかぞふるに暇あらず。近隣の人皆知る所にして、恐尊敬する事猶舊のごとし。賞罰ただしき霊像にして、垂迦ハ白蛇のすがた、有縁のものはたまたま是を拝む。今年錦帳を開て結縁せしむる事、唯願くは国家安全万民豊楽にして、現当二世の利益あらしめんのミ。

当時の勤行、代々伝て地蔵尊を先とすること、由来旧記伝説に有。時に延享元年甲子六月日安居寺現主堯快

敬白

江戸時代中期には、このように理解されていたのであろう。「垂迹ハ白蛇のすがた」には、白山信仰が内蔵されている。

安居寺の過去帳には「蔵縁上人、浄定行者寶亀七年、年満六十七、二月」「蔵寂上人、臥行者、延暦二年、在世九十八、九月」とある。蔵縁は前述したとおり泰澄の弟子で白山で修行し、臨終の夜地蔵号を唱したと伝えられる人物である。この蔵縁、蔵寂は共に白山と泰澄に深い関りを持ち、また共に「蔵」のつく名前に、地蔵信仰もイメージされ「地主地蔵」ともオーバーラップしてくる。

2、福光町岩木御坊山の地蔵

「地主地蔵」のある福野町安居と隣接する地区が福光町岩木である。岩木は、福光町北部にあたり戸数七十五戸（平成三年現在）で、東に小矢部川が流れ、南には明神川が小矢部川に入っている。西には桑山

山麓が広がっている純農村地帯である。寺院は、真宗大谷派金色山慶誓寺（貞享五年慶誓創建）がある。神社は、延喜式内社に指定されている荊波神社が鎮座している。この神社の後方の山中には、町指定史跡の志留志塚という墳墓がある。

岩木村は、元和五年（一六一九）利波郡家高ノ新帳（『砺波町村資料』）によると、本百姓が十五軒あり砺波郡では古くから開けた村であることが理解できる。

岩木の東に御坊山があり、その頂上に愛宕社がある。その御神体に首の取れた地蔵半跏像がある。石材は、微粒の砂岩質でありやや風化は進んでいるものの、右手の錫杖、左手の宝珠は確認することができる。首のとれた状態での高さは三十センチ、幅は十五センチである。「地主地蔵」よりは造りは、やや雑で製作時代は下ると思われる。

岩木は「正徳社号帳」によると八幡・諏訪・富士権現の三社が記載されているが、この御坊山の愛宕社は記載がないのである。また、「神社明細帳」（富山県立図書館蔵・明治十二年）にも記載がない。「正徳社号帳」による富士権現は、「神社明細帳」によると、現在の荊波神社にあたる。八幡・諏訪は、明治四十一年に荊波神社に合祀されたとある。

『福光町の石仏』（福光町教育委員会刊・平成二年）に、この石仏について次のような「由来・伝説」を載せている。

創建年月や由来は定かではないが、部落民は「火の神様」として崇め、毎年例祭を厳修している。この山をご坊山と呼んでいるので寺と関係あるのかも知れない。どちらにしても火難をはじめ天災悪疫の邪霊から守るための造立と思われる。

一説には、部落内の「オヤッサマ」の家が火難に遭ったので、部落の火難防護の地蔵尊として造立したものであるという。

また『荊波の里』（斉藤信一著・平成三年刊）によると「神社割」とう俗称地がありそれについて次のようにある「水神様を祀ってあったところで、麻生谷の県道淵、波多木工所北で、五輪塔の空風輪が出土し現在愛宕社に祀ってある」とある。斉藤氏によると、この地から多くの五輪塔が出土したという。そしてその一個が、愛宕社に現存している。

これらを総合し、想像を逞しくすると、「神社割」という俗称地に、オヤッサマの屋敷神があり、オヤッサマが火難に遭い、その際に御神体が御坊山へ持ってこられたのではないだろうか。

「正徳社号帳」に記載が無いのは、この時すでに、堂宮を形成していなかったか、また山伏、神主、村方の持分では無かったのではないだろうか。

3、福光町竹内熊野神社の地蔵

竹内は、江戸時代には竹ノ内、清水明、出村、千上丸を総じて竹内四ケ村と呼ばれていた。室町時代の応永二十八年（一四二一）十二月十一日の「石黒荘内広瀬郷領家方代官職請文案」（仁和寺文書）の中に、竹内の地名が出て来るのが初見である。元和五年（一六一九）利波郡家高ノ新帳によると、清水明十一軒、同出村二軒、竹之内八軒があり、千上丸には家が無かった。元禄十二年（一六九九）の大西村善六から改作奉行所へ書き上げた文書にも「只今千上丸村ニハ家無御座

候旨」とある。また『越中志徴』によると、

○竹内四ケ村　郷村名義抄に、此村昔年は竹内村・清水明村・出村・千上丸村四ケ村に御座候處、四ケ村一ケ村に罷成、今程は竹内四ケ村と一名に唱申候。何頃より之儀に候哉相知不レ申候。正保・寛文・貞享高辻帳に、清水明村と御座候。○今此村の枝村に千丈丸・清水明あり。按ずるに、此邑名は同郡太美郷の才川七村と云村名に同じ。竹内は惣名にて、竹内より清水明・千上丸・出村の三村を立、後に合併して一村となしたるならむ。清水明・千上丸は古への名田にて、能登國羽咋熊野方郷の豊後明村を豊後名とも書けり。又千上丸は礪波郡の石王丸村・五郎丸などの邑名もありて、名田の遺構なるべし。其かみ此四ケ村を竹内四ケ村と呼びたるを、直に邑名となしたるならむ。

「正徳社号帳」には「熊野権現　竹内四ケ村」とあり、「神社明細帳」には竹内字畑田と竹内字仙上丸に「熊野社」があることになっている。現在の竹内にある熊野社は、竹内畑田のものである。

この熊野社の、本殿脇に石造の堂がありその中に、地蔵半跏像の石仏が入っている。これは岩木のそれと同じく首の取れた、微粒の砂岩質のものである。この周辺には、多くの五輪塔の中世石造物が集められている。この石仏については『福光町の石仏』には次のように由来を記している。

竹内部落には、舘部落に近い竹内部落の田の中に、千手丸という二十坪ほどの小さい丘があるが、ここに昔、堂舎僧坊があって賑わった。その付近に温泉が噴出したことから薬師堂が建立されたが、大正末期頃、現在地の竹内熊野神社境内に堂宇と一緒に如来尊像が移し祀られた。

頭部欠損し、全体として摩耗が甚だしい。

現在竹内の熊野社にある地蔵半跏像は、元竹内千上丸の熊野社の御神体であった可能性が大きい。大正末に現在地に移されたのであろう。

この竹内の周辺には、弘長二年関東下知状に出てくる柿谷寺の指定地である舘字白山があり、また泰澄あるいは浄定行者の開基と称した皆住院のあった才川七がある。

4、湯谷八幡社の地蔵

福光町の北西部に位置し、山間の農林業の地域であり、泰澄によって開かれたという湯谷温泉がある。元和五年（一六一九）利波郡家高ノ新帳によると、本百姓が五軒であり、「正徳社号帳」で八幡がある。『越の下草』に次のような一文がある。

一、湯谷村温泉　蟹谷郷湯谷村に昔ありて、今はなし。

人皇第四十四代元正の御宇養老四年庚申五月十七日、泰澄大師医王山海蔵寺にまします頃、近国の病者をあはれみ此所にて加持し給へば、一夜のうちに温泉湧出し、是に浴する者忽ち病苦癒せりと。則ち泰澄手づから霊木を以て、御長一尺一寸の薬師の尊像を彫刻して五間四面の仏閣を造営し是を安置し給ふとぞ。其後年々繁昌して入湯の貴賤踵をつく。

この湯谷の八幡社に、地蔵半跏像がある。舟型光背で、やや風化が

進んでいて、ちょうど首で亀裂が生じているが完成品である。

5、利波河神明社の地蔵

福光町の北東部に位置する。利波郡家高ノ新帳によると本百姓が二軒、『正徳社号帳』には、この地方では珍しい天王である。ところが「宝暦九年神社改書上帳」（能州石動山大宮坊無住ニ付拙僧共江御預山伏越中能州分　神社改書上帳　拙寺貫請申候法厳寺　宝暦九己卯載当山方山伏頭乾真寺　天道寺　醫王寺」中越郷土叢書第十八集所収）によると「一、祇園社　利波河村氏神」とある。また「文政七年甲申七月上之　由来並持宮御尋ニ附書上帳」（中越郷土叢書十八集所収）によると「一、氏神祇園　砺波郡利波河村。神明宮　同村水守宮」とある。　そして明治十二年の「神社明細帳」によると、「村社神明社」となり末社に水神社がある。『富山県神社誌』（県神社庁刊・昭和五十八年発行）によると「境内末社（本殿に向って右方）の水神社（御祭神、神武天皇）と村民に呼ばれてゐる末社が往古の末社神明宮と思はれる。同じく左方の小祀は水堂様と村民が称し村の少年団を中心に祭りが受け継がれてゐる」とある。

この本殿の向って右方の小堂に、地蔵半跏像が鎮座している。この石仏は、胴で半分に切れていて、その理由については『福光町の石仏』に詳しく記してある。

創建年月や由来は不詳である。

昔は、井口街道（現在の高橋政成宅横から川原に通ずる農道）に鎮座していた。たまたま井口城主が馬で通ったところ、この地蔵尊前で馬が立ち止まり、前へ進まなかった。城主は大いに怒り地蔵尊の顔面を刀で切りつけた。すると馬が前進したという。地蔵尊の顔面が斜めに切れているのは、そのためである。その後城主の命令で神社敷地に移したという。

利波河の神明社は、正徳、宝暦、安政、明治と社名が天王、祇園、神明と変り、また末社も、安政から明治にかけて神明から水神社に変ってきている。この地蔵半跏像も、天王に関わりあるものと思われるが、推憶の域を出ない。

6、小矢部市道林寺の地蔵

小矢部市の中央部に位置しており、安居寺の山系にあり、倶利伽羅峠の入口に近いところにあたる。近くに中世の平城蓮沼城跡があり、明応二年（一四九三）十月十二日の「慶春白状注記」に「越中蓮沼道林寺銭拾壱貫弐百文」（「教王護国寺文書」）とある。

元和五年の利波郡家高ノ新帳には、本百姓十二軒、「正徳二年社号帳」には、諏訪林、地蔵林、水ノ宮があり「村中より支配仕来申候」とある。「宝暦九年社号帳」には、大山祇社となり、「神社明細帳」には、大山祇社と八幡宮があり、八幡宮は大正四年に大山祇社へ合祀されている。

この大山祇社の前の道路をはさんだ場所に小堂がある。ここに地蔵半跏像が鎮座している。『ふるさとの石仏第七集埴生、子撫地区』（小矢部市教育委員会編・昭和六十一年刊）によると「現在地より百メートル程西の蔵王堂のやしきから昭和四十九年、土地改良の際、六地蔵のわきに移す。お祭りは八月二十五日に行われる（南竜吉氏七九才談）」とある。

これは「正徳社号帳」の地蔵林の堂宮が蔵王に社名が変ったのであ

ろうか。

福野町安居寺の地主地蔵も、「正徳社号帳」では地蔵林と関わり深いと思われるので、道林寺の地蔵も地蔵林と関わりがあるのだろうか。

7、砺波市東中神社の地蔵

東中は、砺波市の南西部に位置し庄川扇状地の中央部にあたる。この地方の特徴である散居村の広がる地域でもある。この地域は扇状地でありながら、南北に長く微高地の続く安定したベルト地帯であった。南の林地区には、延喜式内に此定される林神社があり、また北には同じく七社に長岡神社がある。東中は、その中央部に位置するところにある。

元和五年の利波郡家高ノ新帳によると、本百姓七軒であり、「正徳社号帳」によると剣宮、八幡、熊野の三社である。現在これら総て合祀され東中神社となっている。地蔵半跏像は、東中神社の本殿脇に置かれている。この地蔵は、やや大ぶりで丁重な仕上げになっている。意識的に首が切れたような状態となっている。

この地蔵は、「正徳社号帳」の剣宮、八幡、熊野の御神体であったと思われるが、それは、わからない。「神社明細帳」には、次のようにある。

富山県管下越中国西砺波郡林村東中村字村中一七六〇番地鎮座　村社　東中神社

一、祭神　素盞嗚尊　誉田別尊　伊弉諾尊　速玉男命　事解男命　健御名方命

一、由緒　素盞嗚尊ハ古来林村大字東中村字村中一七六〇番地鎮座村社剱社ノ祭神ナリ

誉田別尊ハ古来林村大字東中村字村中一三九七番地鎮座村社八幡宮ノ祭神ナリ

伊弉諾尊・速玉男命・事解男命ハ古来同村大字同村字村中九〇六番地鎮座村社熊野社ノ祭神ナリ

健御名方命ハ古来同村大字同村字三十五歩一七九番地鎮座無格社諏訪社ノ祭神ナリ

以上四社共ニ勧請年月及沿革未詳、然ルニ右村社八幡宮及熊野社并無格社諏訪社ハ維持方法確立セサル為メ、明治四十年七月二十五日村社剱社ヘ合祀シ総社号ヲ東中神社ト改称ノ旨出願、同年九月二日其許可ヲ得、同年九月十三日合祀執行ス

一、社殿　本殿間数　前口一間三尺　奥行壱間

拝殿間数　前口二間二尺　奥行一間五尺

幣殿間数　前口三間二尺　奥行二間三尺

一、境内　坪数二百九十四坪　地種　官有地第一種

一、氏子　戸数百四十一戸

8、砺波市下中条比売神社の石仏

下中条は、庄川の中流左岸に位置し、現在の東保と西保の間である庄川の川床にあった村であり、中世には般若野荘に入っている。寛政三年には村高十一石余りであった。元和五年利波郡家高ノ新帳には、本百姓五軒であり、「正徳社号帳」には山王、比売、神明の三社があ

る。この比売に関しては、延喜式内社に此定されている。『越中志徴』にこの比売神社について詳細に記しているので載せる。

○比賣神社　下中條村。○神名帳に、礪波郡比賣神社雄神社と竝び載せられたり。されば雄神に対したる比賣神にて、雄神社の近き邊りに鎮座る神社なる事いちじるし。此神社國史に所見なし。○正徳二年十村書上神社帳に、下中條村比賣神社。社人同郡頼成村丹波持分。又柳瀬村延喜式内比咩大神。社人同郡安川村伊勢持分と載せたり。下中條村の社をば比賣神社とし、柳瀬村の社をば延喜式内比咩大神と載せたるもの、其頃里人の呼なしたるまゝを載せたる事いちじるし。此両村は前に載せたる村方傳説書に據る時は、往古一村なれば、何れもとは同社なる事いちじるし。○下中條村傳説書に、下中條村の神社、村方にては延喜式内比賣神社与往古より申傳来候。正徳二年宮御調理にも、比賣神社与書上有レ之、其外御調理等都而書物姫野神社、又姫神社与有レ之、文字違候儀は有レ之候得ども、唱替りの儀は無レ之候。持分神主頼成村林氏之書上には、市杵嶋姫命、又市姫興有レ之候へ共、同氏所持之安永六年之書物には、比賣神社。祭神市杵嶋姫命与有レ之候。且又正徳二年柳瀬村の書上に、比咩大神与有レ之、肩書に延喜式内与有レ之候へ共、此儀は前々記候通、中條村之内小名に而分村いたし候事故、以寄候儀を書上候に而可レ有レ之与相聞候。云々。又村方に比賣神社・山王宮・神明宮与三社、往古よりの舊社に而、社地も三ケ所に有レ之處、寛政三年庄川洪水入、川かた側一村多分轉地、三ケ所之社地社共流失仕、人家も建替、他村領に家建いたし候者も五軒有レ之、就レ夫村方領上に開発村領請込、假社地に文化二年九月社再建、同社に相祭置候處、嘉永六年二月最前比賣神社之社地流失跡江纔之社地取立、社再建歸座いたし候。云々。

また「神社明細帳」には次のように記載がある。

富山県越中国東砺波郡柳瀬村下中条字西領四十七番地鎮座

村社　比売神社

一、祭神　市杵嶋比売命　天照皇大神　大山昨神

一、由緒　市杵嶋比売命、古来現地ニ鎮座村社比売神社ノ祭神ニシテ、勧請年月等不詳、往古ハ本村大字柳瀬村ヨリ下モ壱里余ノ所中条村ト唱ヒ雄神川又庄川ト云フ両岸ニ跨リ里程参拾町余東西ニ保アリ（東ニ隣ルヲ東保七ケ村ト云ヒ西ニ隣ルヲ西保三ケ村ト云フ、今ノ本郡東般若村大字東保村、本郡北般若村大字西部金屋村是ナリ）是ヨリ上ミ弐拾町余殺生禁止ノ地ナリシト古老ノ口碑ニ存ス、就中庄川数回ノ水害ニ罹リ荒地ヲ開拓シ現今柳瀬村庄中村、東開発村、下中条村ノ四大字ニ別レ小村トナレリ、且該社ハ従来延喜式内比売神社ト書載シ来ル、其確書ハ無之、大山昨神、勧請年月等不詳、往古ヨリ末社ト称シ領東ニ有之社殿、寛政四年庄川出水ニテ流出、其後比売神社ヘ合併相殿ニ祭リタル無格社日吉社ノ祭神ナリ

天照皇大神　勧請年月等不詳、往古ヨリ末社ト称シ領上ニ有之社殿、寛政四年庄川出水ニテ流失、其後比売神社ヘ合併相殿ニ祭リタル無格社神明社、又天保年間当村地

内新開ノ守護神トシテ当村字中川原六拾八番地ノ二ニ勧請シタル無格社神明社ノ祭神ナリ、
右日吉社外弐社ノ無格社ハ維持難相立ヲ以テ村社比売神社ヘ合祀シ尚同時ニ字中川原鎮座無格社神明社跡地譲与方大正弐年壱月七日許可ヲ得テ同年同月拾七日合祀執行ス

一、社殿　本殿　前口　壱間
　　奥行　弐尺
　幣殿　前口　壱間五尺
　　奥行　壱間三尺
　拝殿　前口　壱間五尺
　　奥行　壱間参尺
一、境内　坪数　弐百八拾坪　地種　官有地第一種
　　「外ニ八拾六坪」
一、氏子　戸数　参拾六戸

以上

この比売神社の御神体として、地蔵半跏像がある。高さ三十六センチ、幅二十五センチと、やや小ぶりであり、首から上はあきらかに補修されてある。東中神社のように、首が意識的に切れたような感じがする。「正徳社号帳」による、山王、比売、神明の御神体と思われるが、神明の御神体はこの地方では雨宝童子が多く祭神とされている。

比売神社には、地蔵半跏像の他に杉材の一本造りの男神像や唐風の女神像があり、特に女神像は、鎌倉時代の作といわれている。この女神像が比売に此定されるならば、地蔵は山王に此定できるかもしれない。

9、砺波市祖泉神社の地蔵

砺波市祖泉は、庄川の中流左岸に位置し、旧庄川の流路である千保川の右岸にあたる。中世には般若野荘域に入り、この荘の西部に位置していた。元和五年利波郡家高ノ新帳によると三軒の本百姓がある。「正徳社号帳」では八幡となっている。

祖泉神社の鳥居の前に、豪華な小堂が二つあり、向って左の堂の中に地蔵半跏像が鎮座している。この堂の後には、中世の如来形石仏も一体安置されている。

正徳二年からのこの宮の奉仕者である神職黒田立雄宅には、「正徳二年社号帳」の控が残っている。「正徳弐年五月四日産子方村々氏神帳」である。それによると、

祖泉村

一、氏神八幡支配　　黒田伊勢掾正家
　　此歩数三百歩程、此社内二地蔵堂御座候
　　〃

とあり、地蔵堂があったことを記している。この地蔵堂に鎮座していたのだが、この地蔵半跏像なのであろう。ところでこの地蔵の祭日は、祖泉神社と同じ十月三十日で、祭の道具一切も祖泉神社に保管してあ

るということなどで、それを暗示している。[14]

祖泉神社から北東へ二、三百メートル隔てたところに真宗大谷派西城山万遊寺がある。ここには、梵篋を持つ六体地蔵の内一体と思われる石仏がある。これは乳白色の緻密な砂岩で高さ六十七センチ、幅二十七センチの厚肉彫りの立像である。現在万遊寺の基地の東隅に、観音堂と称される小堂があり、近くにある柳瀬比売神社氏子の管理で祭祀されている。ちなみに柳瀬は「正徳社号帳」には観音・地蔵が記載されている。

10、砺波市正権寺の湯の地蔵

砺波市正権寺は、市の東部の山間部に位置し『越中志徴』によると『正権寺　郷村名義抄に、比村往古正権寺と申寺御座候に付、村名と相成候由申伝候」とある。

この寺にあったという地蔵半跏像が、「正権寺の湯」で保持されている。この湯主の北条芳夫氏によると、正権寺の五社能社の御神体であったと述べている。正権寺は元和五年の利波家高ノ新帳によると二軒の本百姓で、「正徳社号帳」には五社権現と神明である。

般若野荘域には、石動山信仰の五社権現の分霊社が多く分布している。[15]その一社が正権寺の五社能社である。『富山県神社祭神御事歴』によると、この社は金山彦命と大加牟津美命であり、金山彦命は金属神をイメージされる神である。

『増山城跡調査中間報告書』所収の「増山城周辺の遺跡分布図」によると、正権寺の五社能社付近から中世礎石の報告があり、また遺跡が集中しているところで古くから開けたところである。

「正権寺の湯」にある地蔵は、この湯の源泉にあり、「薬師如来」として大事にされてきた。小堂に入っている為に地蔵の全体像は把握できないが、胸部が左から右に意図的に切れた跡が残っている。

11、平村上梨白山社の地蔵

越中五箇山の平村上梨は、庄川中流左岸の河岸段丘に位置している。ここにある白山社には文亀二年（一五〇二）四月二十日紀銘の木造棟札がある。この白山社は、泰澄大師が人形山に籠って修行したとき、白山の本地仏十一面観音の神託を得て人形山頂に堂宇を建て、後に現在地へ遷座したといわれている。

この上梨白山に、地蔵半跏像がある。現在本殿の横に置かれている。像容に傷は無く、堂内仏として大事にされてきたのであろう。

『越中五箇山平村史下巻』には、上梨に次のような伝説を載せている。

玉岩の伝説

村はずれに、どこから来たのか、高さ四メートル、廻り二十メートルほどの丸いかたちの大石がある。昔から玉岩と名つけ、「この石の下に七おしき半の黄金が隠されている」との伝説がある。何しろ大きな石なので誰一人として動かすことも掘ることもできなかった。

あるとき、若い衆がおおぜいの勢で掘ってみることになった。夜をえらんで掘り始めた。月夜の静かな夜だったという。

ところが、石の下からは、真白な大きな蛇があらわれた。白蛇は、おどろく若者たちをしり目に、月の光に照らされながら、ゆうゆうとのり石の方角へのがれていった。

それ以来、白蛇は神の使者であるとして、この玉岩を崇敬するようになった。

福野町安居寺の地主地蔵も、「安居弥勒山地主地蔵尊略縁起」（延享元年）によると「垂迹ハ白蛇のすがた」としている。白山信仰の片鱗がイメージされる。

また上梨白山宮の縁起[16]によると次のようである。

抑当社白山妙理大権現ハ人皇四十四代元正天皇ノ御宇泰澄大師医王山開闢シ玉ッテ以来辰巳ニ当テケン山有リ彼ノ山ニ夜ナ夜ナ紫雲タナヒキケリ大師コレヲアヤシミ玉ヘ彼ノ山ニ登リ一七日籠リ玉ニ満ツル暁二十一面観世音光ヲ放テ現レ玉ヘ大師ニ告テ曰ク我ハ白山之本地ナリ仏法ヲ擁護セント欲シ此山ニ来リ汝ヲ待ナリト曰フ大師歓喜ノアマリ此山ニ堂塔ヲ建立自ラ黄金ヲ以テ彼ノ尊像ヲ作リ安置シ玉ヘリ今ノ人形山是也然共兵火ノタメニ堂塔焼失シ其後小堂ヲ建テ尊像ヲ安置シ奉リ年月経テ天治二乙巳三月廿六日ノ夜当村市良右衛門之夢想ニ告テ曰ク我ハ人形山白山権現ナリ汝我ヲ此村ニ遷シ氏神ト崇敬セバ一村繁栄ヲ守護スヘシト告玉フニヨリ彼ノ尊（像）ヲ守リ奉リ当社ニ遷シ奉ル也ト云云。同御厨子ニ奉安置諏訪八幡宮ノ御本地阿弥陀如来ノ尊像ハ行基菩薩ノ御作也。謂レ有テ市良右衛門先祖ヨリ伝来ナリシガ夢想ノ告ニヨリ当社ニ遷奉リ二尊同事之氏神ト奉敬依テ毎歳三月廿六日ヲ祭礼ト定メ如此謂也。一度ヒ拝スル輩ハ現世ニテハ息災延命子孫長久ニシテ後世ハ安楽浄土ニ引導シ玉フ疑ナシ慎テ拝礼ヲトゲラレマスヨウ。

天保十四年癸卯三月廿六日ヨリ廿九日迄開張上梨邑ニ於テ

ちなみに、この白山宮本殿は国指定重要文化財である。

六

高岡市伏木一宮に、古くから越中一宮と称された気多神社がある。加賀国白山比咩神社蔵の『白山記』には、新気多と記されてあり能登気多神が勧請され、二神（二上）と新気多と争い二神が無力で、新気多が越中一の宮となったとしている。

この気多神社の別当寺が真言宗慶高寺であり、延宝二年（一六七四）の書上げには次のようにある。

越中一宮慶高寺（真言）

御尋ニ付而申上候

一、越中一宮権現者元正天皇之勅願、養老二年行基菩薩之御建立、一国之大社由申伝候。乱世之砌及大破、一社一寺罷成候。然共日本廻国六十六部之経于今此社納申故、御代々御修理被為仰付候。正保弐年ニ従利常様本社・拝殿・三社之御輿等建立被為成候。其後慶安三年寺社領拾石被為成御付候。則御一行頂戴仕候。権現宮林之儀者従先規拝領仕罷在候。年久敷事候得者、年号ハ不奉存候。以上。

延宝弐年七月十一日　　越中一宮　慶高寺判

明王院

気多神社と慶高寺に関して、林善太郎は『富山県史蹟名勝天然記念物調査報告書第十号』（昭和五年発行）において、「伏木一宮気多神社

につきて」の論文が載っている。その中に興味深い文書が紹介されている。

○一宮神官大江氏文書

従二太政官一由来就二御尋一書上帳　明治元年

越中一宮別當

慶高寺　法海代

（略）

一、白山宮菊理媛命、本地地蔵菩薩

右同所に御鎮座有之候御事

（略）

この文書で、気になるのは「白山菊理媛命、本地地蔵菩薩」とあることである。この地蔵については、林喜太郎の同報告の中に次のようにある。

○堀井三友氏調査

一、地蔵菩薩像　高三尺五寸五分

本像は寄木造玉眼嵌入の木彫立像であって、右手に錫杖をつき左手に賓珠を捧げ後に圓光を負ふて蓮華臺に立つ姿である。この袈裟のつけ方には快慶一流の流麗さは窺はれないが重厚な刀の行方に鎌倉後期を降らないことが肯首される。圓光蓮華臺錫杖等何れも後世の補足である。

この地蔵は、現在旧国分寺跡とされる薬師堂に安置されている。白山菊理媛命が本地地蔵菩薩として意識されていたのか、また気多神社にいつ頃勧請されたのかは、わからない。

七

「正徳社号帳」を眺めると、砺波郡の場合神明が極わって多いが、その中にあって仏教と習合した堂宮も多い。たとえば観音・薬師・大日・毘沙門・十一面・釈迦・権現・明神・弁財天等である。その中に地蔵十六社がある。射水郡の五社より三倍多いのである。利賀村大豆谷の八幡宮には、高さ三十九センチ、幅二十九センチの桧材一木造りの僧形八幡神像がある。右手に錫杖、左手に宝珠の地蔵半跏像の像容である。背面には永和四年（一三七八）の銘が入っている。また小矢部市杉谷内の日吉社には、木造僧形神坐像があり、その内一体は、地蔵半跏像の像容であり、この地方に多く、このような像容の御神体が展形していることがわかる。

白山山麓の鶴来町白山町には、カタガリ地蔵といわれる石造地蔵半跏像があり、一四世紀末から十五世紀前半の造顕とされている。[17] 鶴来町には、このような地蔵石仏が、八幡町や一閑院に分布しているという。桜井甚一氏によると、石材が灰白色の凝灰岩を用いた地蔵の分布は、加賀地方では鶴来町を中心とする山麓地帯には能登に優るとも劣らぬものが遺存する、[18] とされている。

地蔵半跏像石仏は、石川県では、能登と鶴来町附近に遺存しているとのことである。ところで越中では、砺波郡の古くから開けた地域の神社の御神体として鎮座している。氷見地方にこのような石材と像容の地蔵が、多く展開していることは『富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書』で知り得ているが、実見していないので今後の課題としたい。

本稿では白山信仰と地蔵半跏像について言及したかったが、傍証のみしか言及し得ず、また思い込みと仮説のみが先行したようである。多くの先生方から叱正をお願いしたい。

注（1）桜井徳太郎編『地蔵信仰』所収、高橋貢「地蔵菩薩霊験記」の成立の一背景　四〇頁
（2）同書所収、地蔵信仰の伝播者の問題　――『沙石集』『今昔物語集』の世界――　収録論文解説
（3）平泉澄著「泰澄和尚伝記考」（『泰澄和尚伝記考』所収）
（4）下出積与著「泰澄和尚伝説考」（『日本古代史論集』所収）
（5）浅香年木著「『泰澄和尚伝』試考」（『古代文化』所収）
（6）山岸共著「泰澄伝承」（『白山・立山と北陸修験道』所収）
（7）山岸共著「白山信仰と加賀馬場」（『白山・立山と北陸修験道』所収）四二頁
（8）同著『同書』四八頁
（9）井上鋭夫著『山の民・川の民』所収　田中圭一「解題井上鋭夫の足跡」
（10）井上鋭夫著『一向一揆の研究』二六七頁
（11）橋本芳契著「越中砺波地方における真宗と修験道」（『日本海域研究所報告書』17号所収）
（12）浅香年木著「中世北陸の在地寺院と村堂」（『中世北陸の社会と信仰』所収）三二五頁
（13）安居寺住職談
（14）尾田武雄著「中世石造物」（『砺波市史資料編1・考古・古代・中世』）九一三頁
（15）尾田武雄著「般若野荘における五社権現の研究」（『土蔵三号』）
（16）上平村生田家所蔵写本（天保十四年）（『越中五箇山平村史上巻』）一〇五頁
（17）京田良志「北陸の磨崖仏」（『日本の石仏　北陸編』）
（18）櫻井甚一著『能登加賀の中世文化』所収「普正寺中世墓地の石造遺物」一三六頁

※地蔵半跏像石仏の分布中、射水には二ポイントを加えたが、これは『大島町史』で知り得た本開発の住吉社の御神体と、「しんみなとの石仏」で知り得た、新湊市寺塚原の塚原神社に鎮座するものである。

（補遺）
この稿を書き上げた後の平成六年四月一三日に、福野町の斉藤善夫氏より、福野町安居安居寺の神明堂堂内にシルト岩質泥岩の地蔵半跏像の報告を受け、早速に実見した。
これは石質がシルト岩質泥岩で、造りそのものはやや雑で首が故意的に削り取られた感があり、宝珠も欠落している。
表「砺波郡における地蔵半跏像石仏」と地図「地蔵半跏像石仏の分布」には、とりあえず、追加しておいた。

表① 「正徳社号帳」に見える白山

砺波郡			射水郡		
堂宮名	村名	奉仕者	堂宮名	村名	奉仕者
1 白山正権現	上開発村	社人下蓑村伊賀持分	1 白山権現	中野村	社人作道村宮川和泉持分
2 白山	広谷村	山伏赤丸村鞍馬寺持分	2 白山宮	野村	神主高岡伊豆守持分
3 白山	勝木原村	社人月野谷村越後持分	3 白山	上関村	〃
4 白山	柴野村	〃	4 白山	二塚村	社人二塚村駿河持分
5 白山	五十辺村	〃	5 白山	木津村	神主高岡関伊豆守持分
6 白山	手洗野村	〃	6 白山	五十里村	〃
7 白山	佐加野村	〃	7 白山	矢田村	社人嶋村内記持分
8 白山権現	細池村	社人高岡伊豆持分	8 白山	小竹村	神主高岡関伊豆守持分
9 白山権現	岩坪村	〃	9 白山	西田村	〃
10 白山権現	西明寺村	社人三日市村大和持分	10 白山	朝日新町	社人泉村摂津持分
11 白山権現	矢波村	山伏岩木村大仙院持分	11 白山	朴木村	社人中谷内村河内持分
12 鈴掛白山	赤丸村	社人三日市村大和持分	12 白山	万尾村	〃
13 白山	瀧村	社人安川村伊勢持分	13 白山	堀田村	社人堀田村伊織持分
14 白山権現	南高木村	社人下蓑村但馬持分	14 白山	太田村	社人嶋村内記持分
15 白山権現	林村	山伏杉木村大行院持分	15 白山	太田村	〃
			16 白山	十二町村	社人十二町村主計持分
			17 白山	十二町村	〃
			18 白山	神代村	社人蒲田村土佐持分
			19 白山	蒲田村	〃
			20 白山宮	姿村	社人石動山清水伊勢持分
			21 白山	中村	社人上田村笹波豊前持分
			22 白山	谷屋村	〃
			23 白山	稲積村	社人十二町村主計持分
			24 白山	稲積村	〃
			25 白山	加納村	〃
			26 白山	加納村	〃
			27 白山大明神	柿谷村	社人氷見和泉持分
			28 白山大明神	熊無村	社人氷見和泉持分
			29 白山大権現	阿尾村	社人北八代村河内持分
			30 白山	薮田村	社人藪田村但馬持分

射　　水　　郡					
31 白　山	矢田部村	社人蒲田村土佐持分	39 白　山	早借村	上田村豊前持分
32 白　山	仏生寺村	仏生寺村大和持分	40 白　山	池田村	〃
33 白　山	仏生寺村	〃	41 白　山	池田村	〃
34 白　山	仏生寺村	〃	42 白　山	床鍋村	〃
35 白　山	仏生寺村	〃	43 白　山	田尻村	〃
36 白　山	仏生寺村	〃	44 白　山	老谷村	〃
37 白山権現	中谷内村	中谷内村河内持分	45 白　山	日名田村	〃
38 白山大権現	粟原村	下久津呂村日向持分			

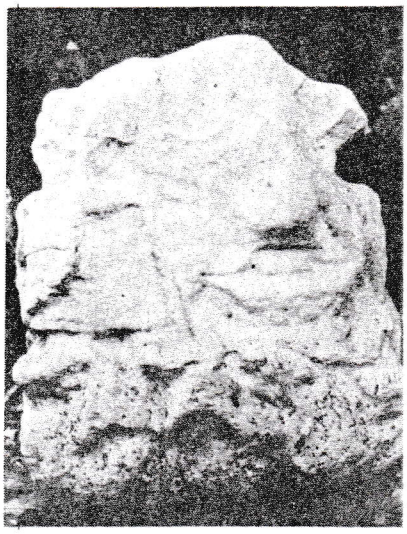
表②　砺波郡の「正徳社号帳」にみる地蔵

堂宮名	村 名	持分その他
1 地　蔵	石 塚 村	社人砺波郡荒見崎村和泉持分
2 地　蔵	名ケ原村	神人砺波郡庄金剛寺村備前持分
3 地　蔵	湯 谷 村	〃
4 地　蔵	五ノ谷村	〃
5 地　蔵	西部金屋村	百姓中支配
6 地　蔵	柳 瀬 村	〃
7 地　蔵	坪 内 村	社人砺波郡宮森村筑後持分
8 地　蔵	綾 子 村	山伏今石動愛宕寺持分
9 地　蔵	鷲 嶋 村	百姓自分ニ相守申候
10 地　蔵	北 野 村	山伏砺波郡北野村海乗寺神事相勤
11 地　蔵	西 明 村	〃
12 地　蔵	是 安 村	山伏砺波郡是安村文珠院神事相勤
13 地 蔵 林	道林寺村	村中より支配仕来申候
14 地 蔵 林	杉谷内村	社人砺波郡水嶋村隼人神事相勤
15 地 蔵 林	安 居 村	同村安居寺支配
16 地 蔵 林	内御堂村	社人砺波郡水嶋村隼人神事相勤

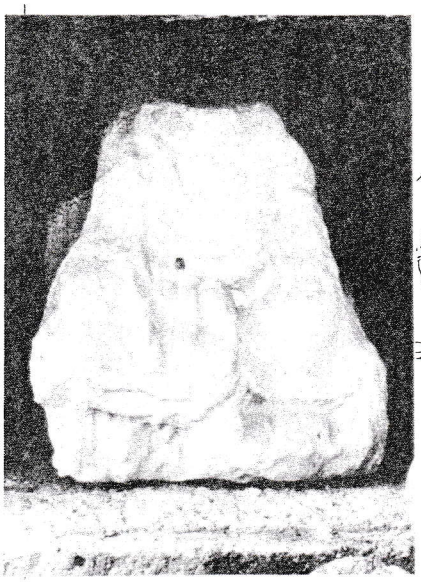
表③　射水郡の「正徳社号帳」にみる地蔵

堂宮名	村 名	持分その他
1 地 蔵 堂	沖塚原村	社人無御座候
2 地 蔵 堂	今開発村	〃
3 地 蔵 堂	布 目 村	〃
4 地　蔵	小 泉 村	社人射水郡小泉村岩崎内匠神事相勤
5 地　蔵	本 田 村	社人射水郡赤井村松岡大和神事相勤

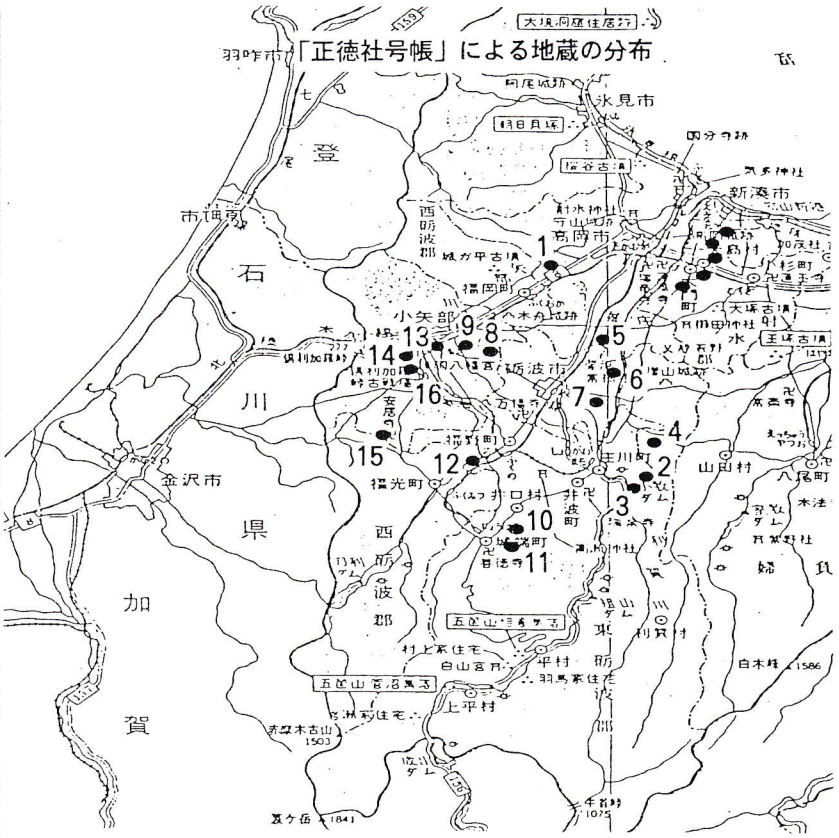
No. 1　地主地蔵

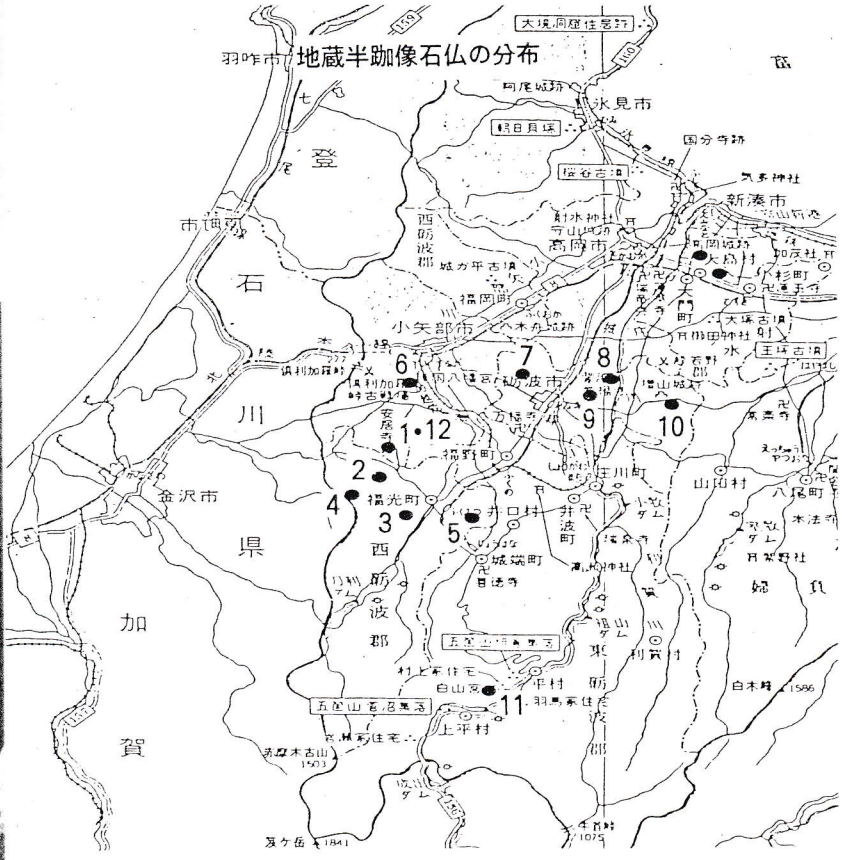


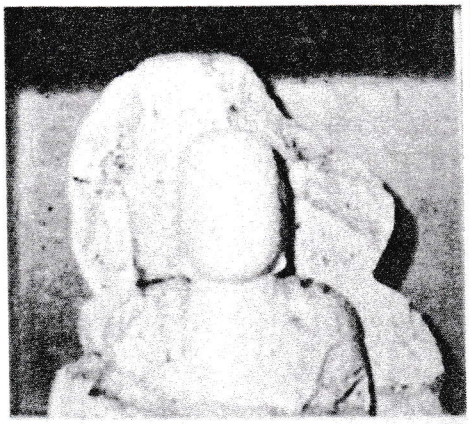
No. 2　岩木地蔵



No. 3　竹内地蔵

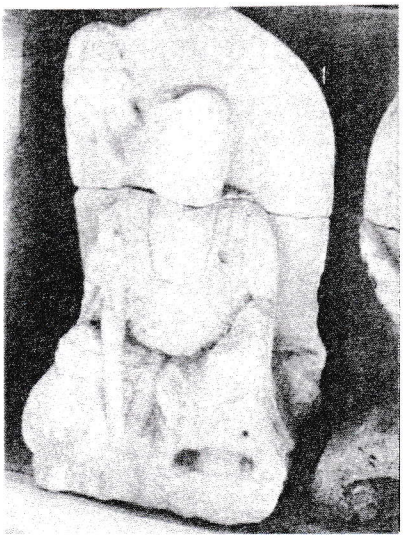




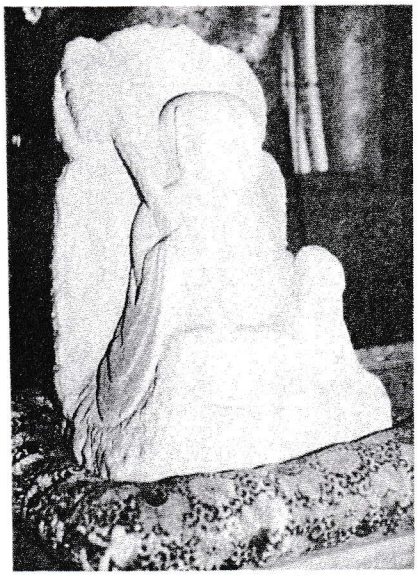


No.10　正権寺地蔵

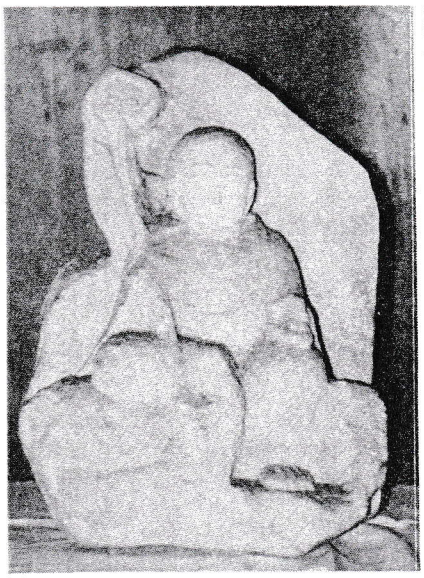
No. 7　東中地蔵



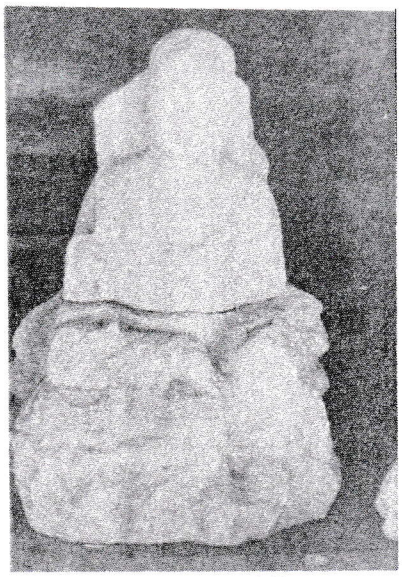
No. 4　湯谷地蔵



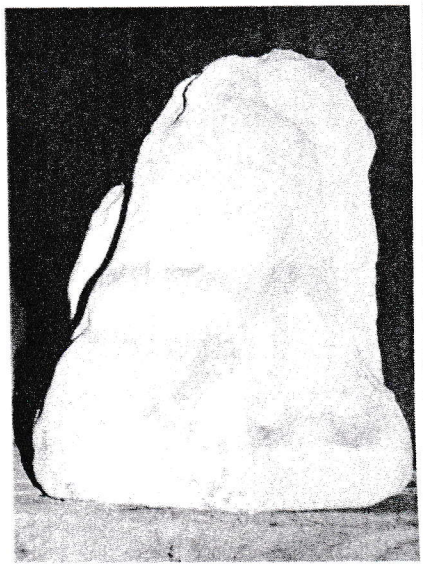
No.11　白山社地蔵



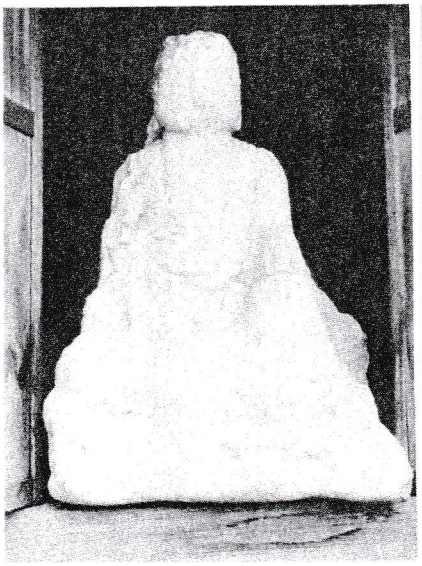
No. 8　下中条地蔵



No. 5　利波河地蔵



No.12　神明堂地蔵



No. 9　祖泉地蔵

No. 6　道林寺地蔵

砺波郡における地蔵半跏像石仏

No.	名称	所在地	高・幅	石質	光背の状態	像容の状態	神社との関りと伝承
1	地主地蔵	福野町安居寺	31.5・21.5	シルト岩質の泥岩	円光背	堂内仏で保存は極めて良い	「正徳社号帳」では地蔵林あり
2	岩木地蔵	福光町岩木御坊山	30・15	〃	首で切れている光背は壊れている	風化が激しい錫杖・宝珠を認めることができる	
3	竹内地蔵	福光町竹内熊野社	35・30	〃	首で切れている光背は壊れている	風化が激しい半跏像を認めることができる袈裟に環がある	「正徳社号帳」では熊野
4	湯谷地蔵	福光町湯谷八幡社	33・18	〃	首で切れている舟形光背	堂内仏で保存は良い宝珠が欠けている	「正徳社号帳」では八幡
5	利波河地蔵	福光町利波河神明社	41・22	〃	腹部で切れている光背は壊れている	顔面が削られている宝珠が欠けている	「正徳社号帳」では天王
6	道林寺地蔵	小矢部市道林寺	34・26	〃	舟形光背光背上部は壊れている	宝珠が欠けている	「正徳社号帳」では地蔵林
7	東中地蔵	砺波市東中神社	48・40	〃	首で切れている光背は壊れている	宝珠が欠けている	「正徳社号帳」では剣宮・八幡・熊野
8	下中条地蔵	砺波市下中条比売神社	36・25	〃	首で切れている円光背	首で切れているが補修してある	「正徳社号帳」では山王・比売
9	祖泉地蔵	砺波市祖泉神社	50・34	〃	光背は壊れている	宝珠・錫杖が欠落している	「正徳社号帳」八幡の地蔵堂
10	正権寺地蔵	砺波市正権寺の湯	50・38	〃	円光背腹部で壊れている	袈裟に環がある	「正徳社号帳」では五社権現
11	白山社地蔵	平村上梨白山社	40・28	〃	円光背	堂内仏で保存は良い	「正徳社号帳」では諏訪権現堂
12	神明堂地蔵	福野町安居寺神明堂	43・34	〃	首が削られている舟形光背と思われる	宝珠・錫杖が欠落している	「正徳社号帳」では観音堂・神明宮・権現堂・地蔵林・はせノ宮

あとがき

◆佐伯さんが富山県功労表彰を受けられた。民俗の研究と文化財の保存に尽力された功績によるもので会員一同の祝意は日を追って挙がっている。尾田君らを中心に氏の著作目録を作成して贈呈しようということになり本号別冊のとおり出版された。なお次号は佐伯さん宛のファンレターの特集を組む予定にしている。今から出稿の心づもりをしていただきたい。

◆わが里も十二月半ばに雪化粧し，何十回と見馴れた冬の散村風景だが，いつも真新しく感じるのは私だけだろうか。雪の重圧は時の流れをゆるやかにして，と一瞬錯覚させるが，どっこい社会の進展とともに音をたてて時は過ぎていく。本誌もはや７号を数えるに至った。３号雑誌の危惧どころかますます充実し，好意あふれる書評をいただいたりして，意を強くしている。今後とも，一層研究の成果や珠玉のような随想を寄せていただくよう願っている。　（市谷）

編集人　尾田武雄・老松邦雄・白江秋広
蓮井正子・原田典子・市谷　博

表紙題字　高池慶磨
表紙絵・カット　出村　忍

土　蔵　第７号

平成６年12月20日

発行　砺波郷土資料館 土蔵友の会
会長　藤井武雄

編集事務局　尾田武雄
〒939－13富山県砺波市太田 1,770
TEL (0763) 32－2772

印刷／となみ印刷出版